

チーム・ティーチングを取り入れた「カリキュラムデザイン」の授業改善

◎原口 るみ（東京学芸大学教職大学院）

○藤野 智子（東京学芸大学教職大学院）

有馬 実世（東京学芸大学教職大学院）

代表者連絡先：rharagu@u-gakugei.ac.jp

【キーワード】カリキュラムデザイン、授業改善、チーム・ティーチング

1 はじめに

本プロジェクトの背景としては、2019年の本学教職大学院改組から6年間の取り組みの成果と課題が挙げられる。本学教職大学院は一学年あたりの定員が210名という日本最大規模の教職大学院であり、学生の背景もニーズも多岐にわたる。必修科目の一つである「カリキュラムデザイン」（以下、本授業）は、今日の学校教育における教育課程編成や実施上の課題を踏まえてカリキュラムをデザインできるよう、理論と方法を学ぶ授業である。これまで、受講生を対象として実施された授業効果調査等から、一定の成果が確認できた一方、もっと多様な教科の考えに触れたかった等の希望が出ていた。

よりきめ細やかに、多様な背景・ニーズを有する学生に応えるため、チーム・ティーチングを取り入れ、協働的なカリキュラムの計画・実施を具現化した授業を開発することで、ディプロマ・ポリシーに掲げる「課題解決に向けて、学校づくり、授業づくりに創造的に参画することのできる『創造的な改革力』」、「協働による実践を通して、省察的に実践を改善することのできる『柔軟な実践力』」、ならびに「学校教育の課題に率先して取り組み、チームとして解決できる『先導的な組織力』」を育成することが可能となると考えられる。

2 本プロジェクトの目的

本プロジェクトでは、教職大学院における専攻科目領域1：教育課程の編成・実施に関する領域の必修科目「カリキュラムデザイン」において、理論と実践の往還をより充実させるため、研究者教員と実務家教員によるチーム・ティーチングを取り入れた新たな授業を開発することを目的とする。

3 本プロジェクトの実施

本授業では、カリキュラムに関する理論や実践例をふまえ、受講生が将来勤務校の他の教員と協働し、教科横断的な視点でカリキュラムを設計することができるようになることを目指した。この目的のため、本授業では「逆向き設計」の理論を用いることとし、履修者は、多様な教科を専門とする3名～5名からなるグループで、グループごとに設定した学校教育目標を意識して単元設計に取り組むようにした。

本授業は、研究者教員2名、実務家教員1名の計3名の大学教員で授業を協働設計・授業実践を行った。具体的には、2回分の授業からなる「ユニット」を4つ構成し、3名の教員が分担して全クラスで授業を行うことで、全14回のうち第2回から第10回までは、外部講師を招聘した第6回も含めて、全受講生が同じ授業者による授業を受講できるようにした。さらに、第11回、第12回には、同じ時間帯に開講する2クラス合同で、各グループで作成したカリキュラムの交流を行い、従前よりも多様な校種や教科の視点からフィードバックが得られるようにした。また、オンライン上に課題発表のプラットフォームを作成し、全クラスがその場を共有することで教科等横断的な視点での学びを行

いやすくした。

表 1 全 14 回の授業構成

回	01クラス	02クラス	03クラス	04クラス
1	教員A	教員B	教員C	教員A
2	ユニットA①	ユニットB	ユニットC	ユニットA①
3				
4	ユニットC	ユニットA①	ユニットA①	ユニットB
5				
6	合同★	合同☆	合同★	合同☆
7	ユニットA②	ユニットC	ユニットB	ユニットA②
8				
9	ユニットB	ユニットA②	ユニットA②	ユニットC
10				
11	★	☆	★	☆
12	★	☆	★	☆
13				
14				

表 2 グループ編成例 (01 クラスの場合)

1	a	対立	S1: 国語	S2: 社会	S3: 理科	S4: 保健	
2	b	信念/価値	S5: 社会	S6: 国語	S7: 小学全	S8: 小学全	
3	d	自由	S9: 小学全	S10: 国語	S11: 社会	S12: 数学	
4	f	関係	S13: 家庭	S14: 小学全	S15: 社会	S16: 国語	
5	g	変化	S17: 数学	S18: 数学	S19: 社会	S20: 理科	
6	h	視点	S21: 理科	S22: 国語	S23: 小学全	S24: 理科	
7	i	権力	S25: 社会	S26: 英語	S27: 国語	S28: 数学	
8	j	システム	S29: 理科	S30: 社会	S31: 英語	S32: 理科	
9	l	デザイン	S33: 小学全	S34: 小学全	S35: 国語	S36: 英語	S37: 社会
10	o	相互作用	S38: 社会	S39: 英語	S40: 数学	S41: 国語	
11	q	影響	S42: 英語	S43: 国語	S44: 数学	S45: 国語	
12	r	バランス	S46: 社会	S47: 理科	S48: 英語	S49: 小学全	

学期末に、研究参加への同意が得られた学生を対象にアンケート調査を実施し、157名分の有効回答を得た。アンケートでは、多様な背景を確認する目的で、出身の学部学科や教員歴、学校種、大学院入学前に多様な教科の考えに触れた経験の有無について尋ねた。さらに、本授業を通して多様な教科の考えに触れられたと思うか 5 件法で回答を求めたうえで、その尺度を選んだ理由/本授業の履修前後で「カリキュラム」や「カリキュラムデザイン」についての捉え方にどのような変化があったか/本授業の経験をどのように生かせそうか等について自由記述での回答を求めた。自由記述内容に関しては、KH-Coder Ver.3 (樋口,2014) を用いてテキストマイニングを行い、共起ネットワーク図を生成し、分析した。

4 成果と課題

アンケート結果から、受講生の約 3 分の 2 が教育学系の学部や学科出身であることや、勤務中 (予定) の学校種は様々であること (表 3)、専任としての勤務経験を持たない学生が約 8 割、経験を持つ学生が約 2 割であること (表 4)、非常勤講師を長年にわたり続けている学生はいなかったこと (表 5) が確認できた。

表 3 勤務中 (勤務予定) の学校種 (n=157)

幼稚園	小学校	小中 一貫校	中学校	中等教育 学校・ 中高一貫校	高等学校	特別支援 学校	その他
3 人	55 人	2 人	42 人	15 人	32 人	2 人	6 人

表 4 専任としての勤務経験 (n=157)

未経験	5 年未満	10 年未満	15 年未満	15 年以上
123 人	3 人	7 人	14 人	10 人

表 5 非常勤講師としての勤務経験 (n=157)

未経験	5 年未満	10 年未満	15 年未満	15 年以上
125 人	32 人	0 人	0 人	0 人

また、約 3 割の学生が、大学院入学時点で多様な教科の考えに触れる機会の不足を感じていた。特に強い否定を示した学生は、理工学、経営学など、教育学系以外の学部学科出身であった (表 6-1, 6-2)。

表 6-1 大学院入学前に多様な教科の考えに触れる機会があったか

とても そう思う	やや そう思う	どちらとも いえない	あまり そう思わない	まったく そう思わない
30人	62人	14人	39人	12人

表 6-2 6-1 否定群の出身学部等

	あまり そう思わない	まったく そう思わない
教育学系	26人	1人
その他	13人	11人

「本授業を通して多様な教科の考えに触れることができたか」との問いに対しては 147 名から (表 7)、「カリキュラムの協働設計の意義を実感することができたか」という問いに対しては 144 名から (表 8) 肯定的回答を得たため、本研究で開発した授業の効果が確認された。表 7 に示した、「本授業を通して多様な教科の考えに触れることができたか」との問いに弱い否定の回答をした 4 名の学生のうち 3 名は 03 クラスに在籍していた。このクラスは、44 名中 21 名が社会科を専門としており、クラス編成やグループ編成における教科の偏りがアンケート結果に影響した可能性がある。この点については、次年度以降のクラス編成やグループ編成の課題とする。

表 7 この授業を通して多様な教科の考えに触れられたか (n=156 未回答 1)

とてもそう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	まったくそう思わない
78人	68人	6人	4人	0人

表 8 カリキュラムの協働設計の意義を実感することはできたか (n=157)

とてもそう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	まったくそう思わない
80人	64人	8人	5人	0人

自由記述内容に基づいて生成した共起ネットワーク図からは、受講生が共通の学校教育目標を目指すことで異なる専門教科の視点や考えに触れられたと考えていることが確認できた。特に、本授業によって生じた「カリキュラム」や「カリキュラムデザイン」の捉えに関しての変化としては、以下のような点が確認できた。

まず、受講前には漠然としたイメージを抱いていた「カリキュラム」について、「児童の実態に即した柔軟な設計が求められることを学びました」といった記述のように、学校教育目標に向かうために生徒の実態に即して柔軟にデザインする必要があることをつかんでいた (図 1 サブグラフ 03)。また、『本質的な問い』を軸に学習活動や評価を設計するプロセスを経験したことで、カリキュラムデザインは理論を土台としながら、実際の子どもや学校の文脈に合わせて創造的に構築していく作業だという理解へと変化しました」などの記述に示されるように、学習前の「計画」のイメージから「評価」を含めたイメージに広がったこともわかった (図 1 サブグラフ 05)。さらに、「カリキュラムをデザインするにあたって、学校教育目標からの逆向き設計は新鮮であった」などの記述からは、受講生が逆向き設計という具体的な手法を獲得したことがわかった (図 1 サブグラフ 04)。本授業で得られたこれらの学びにより、単元間や科目間でのつながりを意識することにつながり、教科等横断的なカリキュラムの編成に役立ちそうだという感触を得ていたことも確認された。

これらに加えて、「カリキュラムを共同設計 (原文ママ) する際に自分が育てたいと思う力やその方法についてかなり考えたが、これは日常的に行われることであるためそういう意味でもカリキュラムデザインが自分にとって思っていた以上に身近なものであることを認識した」、「カリキュラムは誰かが決めたものをやるのではなく、自分で考えていくことができるものだと考えが変わりました」など、教育課程の編成・実施を自分事としてとらえられるようになった、という記述も多く見られた (図 1 サブグラフ 08)。

以上をまとめると、本プロジェクトの成果としては、次の事柄が挙げられる。本学教職大学院における専攻科目領域 1: 教育課程の編成・実施に関する領域の必修科目「カリキュラムデザイン」において理論と実践の往還をより充実させるため、研究者教員と実務家

